

# 視察数全国トップで注目高まる 地域包括ケア「豊明モデル」

愛知県豊明市長

## 小浮 正典



こうき・まさふみ

1969年3月生まれ、大阪府出身。京都大学経済学部卒。朝日放送株式会社から米国ピッツバーグ大学公共・国際問題専門大学院、株式会社朝日新聞社、東京メトロポリタンテレビジョン株式会社、立命館大学法科大学院、イオン株式会社を経て、2012年8月に公募で豊明市副市長に。2015年4月30日豊明市長に就任。2019年再選、現在2期目。

**愛**知県豊明市は民間研究所の調査による2019年度の自治体職員・議員視察受け入れ件数で全国トップになった。その理由は市が推進する「地域包括ケア 豊明モデル」にある。同モデルは、豊明市と藤田医科大学、UR都市機構による三者協定に基づき、医療・福祉資源と地域のさまざまな構成員を連携させた高齢社会に対応する取組み。高齢者が「ふつうに暮らせるしあわせ」を追求する、その豊明モデルの成果と今後の姿を小浮正典市長に聞いた。



### 豊明市の概要

愛知県の中央やや西部に位置する人口約6万9,000人、面積23.22km<sup>2</sup>の都市。市内には織田信長が今川義元を奇襲で破った「桶狭間古戦場伝説地」があるなど、古い歴史と緑豊かな自然環境が特徴。近年は名古屋市南部に隣接していることからベッドタウンとして発展し、鉢物花き市場として全国有数の取扱高を誇る「愛知豊明花き地方卸売市場」や「JRA中京競馬場」でも知られている。

## 医療・介護施設は充実も 中長期課題が

——豊明市を取り巻く医療・介護の状況について教えてください。

小浮 豊明市は面積が23km<sup>2</sup>の小さな市ですが、名古屋市や刈谷市、豊田市にも近接していて通勤しやすい便利なまちであることから、ベッドタウンとして発展してきました。

特筆すべきは、市内に藤田医科大学病院があることです。ここは単独病院としては日本最大規模で、とくに救急医療が充実しています。また、同大学出身者の方々が、市内でクリニック等を開業しておられることなどから、身近な医療・介護施設がとても充実しています。豊明市は医療問題で困難になることはほとんどない恵まれた環境ですが、むしろ施設が充実しすぎて在宅医療や訪問介護が発展しにくいことがあります。

——施設は充実していても、2025年問題と2040年問題があるとしていますね。

小浮 これは全国自治体の共通課題ですが、豊明市の人口分布もほぼ全国平均です。「団塊の世代」と「団塊ジュニア世代」の人口区分に大きなボリュームがあり、2025年ごろに団塊世代が後期高齢者に移行し、2040年ごろには団塊ジュニアが生産年齢人口から外れていきます。これらの問題は自分が市長になるずっと前から問題視され、行政と医療機関で対応の必要性が話し合われてきましたが、具体的な対応に至っていなかったのが現実でした。

——その危機感が「豊明モデル」を生み出す契機になったのですか。

小浮 それは間違いありません。「豊明モデル」は、医療・介護をはじめとする市内のあらゆる機関、市民団体、地域組織が同じ方向を向いて連携し、地域包括ケアのしくみづくりを進めるモデルです。その具体的な動きが始まったのが、2011年の「いきいき笑顔ネットワーク」という取り組みでした。

一般的に、医師はカルテを使って患者を管理します。ケアマネや介護施設は要介護の方々に必要な介護サービスを提供します。ところが当時、この医療と介護はばらばらに動いていたんですね。おそ



藤田医科大学病院

らく、すべての自治体はそうだったと思います。

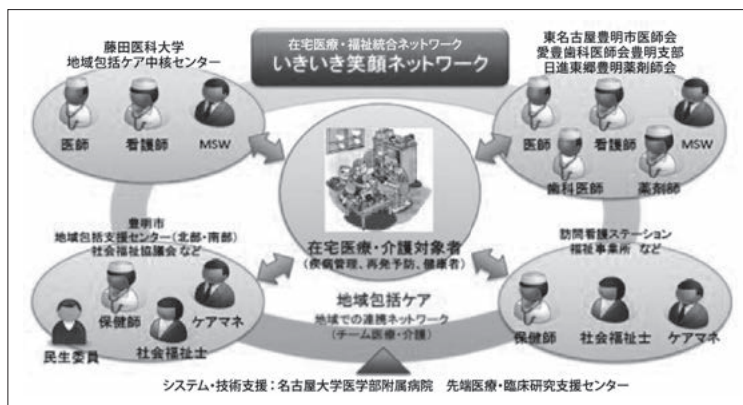
そこに問題意識を持たれた名古屋大学の先生と市内クリニックの先生が豊明市で実験をしたいと申し出てこれ、豊明市もぜひ協力させてくださいと合意して始まったのが「いきいき笑顔ネットワーク」です。これはICT情報共有ツールを導入して多職種が持つ患者情報を共有して「統合ケア」を可能にする基盤整備を行い、チーム医療やチームケアを展開することで医療と介護を一体的に連携させるしくみです。豊明市は小さいので、実証実験がしやすいまちだったことも幸運でした。

## 患者情報の一元化による 統合ケア「豊明モデル」

——「いきいき笑顔ネットワーク」では、患者情報が共有され、統合ネットが確立できたことが大きかったと。

小浮 そうです。もちろん、同意いただいた患者さんだけが、実証実験にあたられた先生のエネルギーによって、協力いただける患者さんも増えていき、「いきいき笑顔ネットワーク」としての成果が上がりました。

加えて、藤田医科大学が高度医療だけではなく地域包括ケアにも力を入れ始め、「地域包括ケア

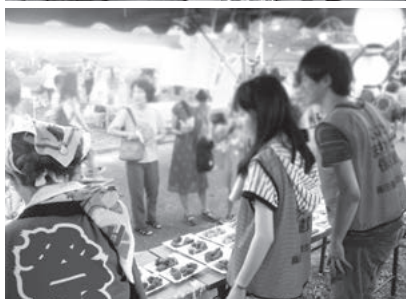








若者向けに改装した団地の居室（上）  
夏祭りに参加（下）



学生の高齢者支援

が行われるようになりました。

これらがきっかけとなって、お年寄りや学生たちと交流するようになり、元気をもらったのですね。学生たちも普段のお付き合いのなかで高齢者の健康状態に気づけるようになり、情報をまちかど保健室につなぎました。その結果、重症化を防ぐ「フレイル予防」（高齢に伴う生活機能低下の予防）が身近な居住空間で始まるという好循環が生まれたわけです。

そのプロセスでは、豊明市と自治会はふだんから付き合いがあるので、自治会と藤田医科大学、UR間での話がスムーズに進むよう市が間に入り、学生たちが住む棟だけでなく、55棟全体としての取組みに広げていくこともできました。

——市の役割はコーディネートであると。

小浮 まさしくそうです。URもこのままでは高齢化が進んで、孤独死のような例も出かねないという問題意識を持っていました。そのためにも住民間の見守りがなされていることが望ましいわけです。豊明団地は一部を除いては多くは階段式です。高齢化に伴って、高い階から空き部屋が生じていましたが、これらの取組みで今では人気がある団地になり、ほぼ埋まっている状態です。建設から50年近く経った団地がほぼ満室で運営されているため、URも成功事例として紹介しています。

コーディネートに徹するのが  
行政の役割

——市も団地に病後児保育施設を設置したり、生

活支援コーディネーターが活発に活動をしてもらえますね。

小浮 市の生活支援コーディネーターは豊明団地に限らず、孤立しがちな高齢者の方々を地域の運動教室やサロン活動などにつなげています。とにかく、高齢者を社会につなげるため、コーディネーターの職員たちはほとんど市役所になくて、日々外に出て、活動しています。

——「外出したくなるまちづくり」に向けた役割は大きいですね。

小浮 間違いなく大きいです。行政側からいえば、「豊明モデル」の中心を担っているのは、この生活支援コーディネーターです。「豊明モデル」で市が主導で特別ななにかをしているかと言えば、他の自治体とそんなに変わりません。ですが、コーディネーターが孤立している高齢者を地域の社会資源や居場所につなぐことで、状況は変わってきます。週に何回か必ずそこに行くことでフレイル予防になり、行けば仲間ができますから孤立も防げる。その場面で力を発揮しているのが彼らなのです。自分たちで事業をやるわけではなく、「どこどこでこれをやっていますから、行ってみませんか」とつなげているだけなのですが。

市の生活支援コーディネーターの活動領域はとても広く、地域から私に「来てくれませんか」と声がかかることがとても増えたのです。ありとあらゆる運動教室やサロンに呼ばれ、行けば職員が誰をどこにつないだかという事情がわかってきます。「ああ、ここでも動いてくれているな」と。

——高齢者の外出支援については、乗り合い交





乗り合い送迎サービス「チョイソコとよあけ」

**通機関「チョイソコ」もありますね。**

小浮 「チョイソコとよあけ」は指定停留所で乗降するオンデマンド型の乗り合い送

迎サービスで、予約の電話をしておけばスーパーや市役所などの目的地まで200円で運んでくれるサービスです。株式会社アイシンさんが実施主体となり、スギ薬局さんも協力しながら運営し、市も応援しています。これは市内のバス路線の改定があった際に人口密度の低い地域の便が減ったことから、両社が名鉄・前後駅周辺の地域でこのサービスの実証実験をやってくれたのです。一定の成果が得られたことから今年度、本格運用を始めました。

健康目的で始まったわけではありませんでしたが、バスが走っていない地域の方には外出のいい動機づけになります。運動教室や医療機関、市役所等に気軽に行けるようになったのです。外出を諦めて家に閉じこもっていた方にとっては、まさに「健康増進」のツールです。市も「チョイソコ」という交通手段で必要な外出を維持し、普通の生活を送って下さいというメッセージを込めています。

## 市内の資源をすべて活用し 地域ケアに取り組む

——その例のように、2017年に9社と協定を締結するなど、民間企業との連携も盛んです。

小浮 それは最終的な「豊明モデル」に向かう、肝の部分です。つまり、市内にある社会資源はすべて活用して高齢化、地域包括ケアの問題に取り組もうということです。例えば地域の「まちかど運動教室」や「体操教室」も市からはインストラクターを派遣しているだけで、運営は地域組織がやっています。

介護サービスも提供する事業者を基本としつつ、他の事業者や市民にも協力してもらい、高齢の方が出かけることで健康が保たれるなら、これほどいいことはありません。とくに一人暮らしの高齢

の方の生活支援につながるサービスを提案される企業なら、豊明市はどことでも手を結びます。市はお金は出しません、責任をもってあなたの方の活動内容を広く市民に知らせますということです。スタートは9社でしたが、その後も合意できた会社と協定を締結し、現在18社となっています。

——ここでも企業のやる気を引き出し、コーディネートに徹していると。

小浮 そうです。それぞれの企業がやりたい範囲でやっていただく。豊明市はコーディネートに徹していて、企業とサービスを提供しているわけではありません。あくまで市民につないでいるだけです。

——そうしたサービスを「公的保険外サービス」と呼んでいますね。

小浮 公的保険外サービスとは、公的保険である介護保険と国民健康保険以外のサービスという意味です。要は地域社会のいろいろな構成員の人たちの力を借りて、公的保険で運営する範囲外のサービスだということです。基本は当事者である企業と住民の関係ですし、市が直接的に関与しているわけではありません。企業が場所を提供したり、無料サービスをやっているときも、市は「どこそこの場所でこういうことをやっています」と紹介するだけで、場所を提供しているわけではない。住民の皆さんは、自らの選好で企業の主催する場所に行くだけなのです。

——企業には自ら存在価値を高めて地域に貢献してもらい、市はそのための媒介をしますと。

小浮 これは割り切っていて、私には企業に社会貢献をしていただくという意識はありません。企業は自分たちの事業の一環としてご高齢の方を



健康長寿延伸等の公的保険外サービスに関する協定式

ターゲットにしたサービスを展開していただければいいのです。

高齢者にとっては選択肢が増えるわけで、外出したくなるメニューが増えれば市はそれでいい。どういう手段で温泉施設やカラオケ、買い物に行こうとかまわさない。なんらかの動機で行動が習慣づき、どこかにつながってその方の健康が保たればいいのです。なによりその人は自分で選んだところに行くので、そこに「普通に暮らせる幸せ」が生じるのではないのでしょうか。だから、ご高齢の方々の満足度がとても高まっていると思います。さほどの金銭的な負担もなく、自分の楽しい時間が週に何回かやってくる。その生活は幸せで心も豊かになりますから、当然、身体も健康になって、長寿につながるというストーリーになっているのだと思います。

——その好循環も、あくまで市はそれをコーディネートしているにすぎないと。

小浮 間違いなく、すぎないのです。そこがこの「豊明モデル」のポイントです。住み慣れた地域に住み続けたい多くの市民のために、市内にあるあらゆる資源を地域包括ケアに活用したいと考えていますが、市が主導することはありません。それぞれの資源を有する方々が得意な分野で活躍いただくことによって、市民がここでずっと普通に暮らせるようになるはずです。

豊明市はそれほど税収があるわけではなく、財政的な余裕はありませんから、運動施設や文化施設は、近隣市と比べるとだいぶ劣ります。そういった面では市民満足度は高くないかもしれませんが、普通に暮らしたいと思っていらっしゃる高齢者にとっては、心地良く、暮らしやすいと思います。

### 地域包括ケアの対象は 高齢者だけではない

——豊明市さんには全国から視察が相次いでいます。この注目される「豊明モデル」は将来どこへ行くのかが気になるところです。

小浮 職員とも話をしていますが、「豊明モデル」は、今は高齢者の方へ向かっています。ですが、本来、地域包括ケアの対象は、高齢者だけではないのです。障害のある方、若いお母さん、あるいは外国人住民の方。さまざまな方が自分の住みたいまちで、自分が希望すればずっと住み続けられ

る環境にあることが、地域包括ケアが目指している姿のはずです。

ですから次の展開としては、さまざまな社会資源を活用して、高齢の方々だけではなく、すべての市民がいつまでも普通に暮らせるまちづくり、それが私たちの目指す方向です。

——最後に自治体職員の人材育成のあり方や自治体職員に対するメッセージをお願いします。

小浮 私は副市長として豊明市に来て、その後、選挙で市長になりました。当初、職員が政策を私に説明するときに、「過去、こうでした」「周辺の自治体はこういう状態です」からスタートするんですね。確かに、これだと責任を負わなくて済みます。

しかし、ほんの少しでも自分の仕事で市民の生活が改善されれば、公務員としてそれは大きな成功でしょう。ですから、自分が市長になって「責任は自分が全部負うので、問題意識を市民に向け、解決に向かってほしい」と指示しました。そこから意識が変わり始めました。温泉施設の送迎バスが市内を無人で走っているのを見た職員がこれを高齢者の健康増進に活用したいと考え、温泉施設に連携を申し入ることで民間企業との協働が始まり、そこでの経験は、のちに市民の移動を助ける乗り合い送迎「チョイソコ」という新たな施策の実現へとつながっていきました。職員が私と空気感を共有して、「やってもいいんだ」と進めていくてくれたことがよかったと思います。

どんな小さいことでもいいから、市民にとってプラスになるかどうかだけを判断基準として進んでいただきたい。市民のことだけを考え、どうしたら市民の問題を解決できるかだけに頭を働かせていただければと思います。

——「豊明モデル」は分権型社会の市民協働の姿をあらためて思い起こさせてくれました。

小浮 市政の目的は市民の皆さんの生活向上です。当たり前ですが、市役所の職員だけでやるよりいろいろな人たちの力を借りたほうがパワーは大きくなります。今は職員とその思いを共有できています。市内のどこにどんな人たちがいて、ここは誰それをお願いしようと話ができる状態になっています。イベントがあれば駆けつけて皆さんと話をしますし、後ろから市民によく肩も叩かれる（笑）。市民と同じ目線でいられるかどうかだけをいつも気にしていますね。

——本日はお忙しい中、ありがとうございました。